

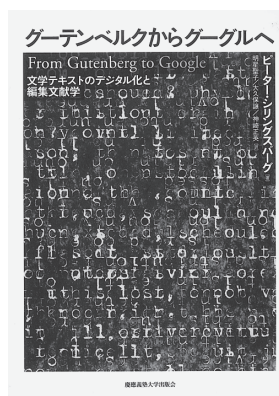
# 5

[書評 | review]

## ピーター・シリングスバーグ(著)、明星聖子/大久保護/ 神崎正英(訳)『ゲーテンベルクからグーグルへ—— 文学テキストのデジタル化と編集文献学』

Peter L. Shillingsburg | Kiyoko Myojo, Yuzuru Okubo, Masahide Kanzaki (translation),  
*From Gutenberg to Google: Electronic Representations of Literary Texts*

渡辺彩香 | Ayaka Watanabe



ピーター・シリングスバーグ(著)、明星聖子/大久保護/神崎正英(訳)  
『ゲーテンベルクからグーグルへ——文学テキストのデジタル化と編集文献学』  
慶應義塾大学出版会 / 2009年9月 / A5判 / 353頁 / 3,200円+税

文学の領域においてアーカイブズ学が果たす役割とはいったい何であり、何ができるのだろうか。この問いは私自身の研究課題であり、まだまだ答えの出ないものである。そんな中、この本に出会った。本書は文学のテキストを電子編集する際、電子サイトを構築する際の理論と問題点を提示している。これらのことから、文学テキストのデジタル化作業に携わる人やデジタルテキストの読者に、デジタルテキストの特質や取扱い上の注意点を示唆している。この本で明らかになる原理は他の分野にも応用できると、著者は冒頭で述べている。ならば、それはアーカイブズ学にも応用できるのではないだろうか。

著者のピーター・シリングスバークは、イギリスの小説家・サッカーを中心とするヴィクトリア朝文学研究を専門とし、コンピューター領域における編集文献学についても研究している。編集文献学の仕事では、サッカー全集の編集責任者として活動した。編集文献学のスペシャリストといってもいいだろう。

また、翻訳は明星聖子氏、大久保護氏、神崎正英氏の3名による共訳である。その中心となっている明星氏はカフカ文学の研究者で、ドイツに留学した際に編集文献学と出会った。

そもそも「編集文献学」とはどんな学問なのか。明星氏が「訳者あとがき」でこの学問の難解さを語っている。本書の中心となる「scholarly editing」という言葉を正確に翻訳しようとしても、日本文学にはない概念であり、かつ各国で微妙に意味が異なってくる。「編集文献学」という訳語でさえ苦しいのだが、そうならざるを得なかったという。明星氏は以下のように述べている。

すなわち、そのモノとは、全集だということである。そして、皆がそれを選ぶということは、そこにはオリジナル性の高い情報が載っているという共通了解があることである。この了解は、全集というモノを作る際には、あのオリジナルとは何かの問いをめぐる意味がなされ、なんらかの「正しい」判断が下されていると人々が見なしていることを意見する。つまり、前にいったあの不毛な問いを回避できない現場とは、この全集作りに関わる現場である。では、そのモノ作りの現場とはどこにあり、誰が判断を下しているのか[1]。

それが、あの前にふれた編集文献学という領域である。ドイツにおいて文学研究の一角に、いまいった研究基盤のモノ作りをめぐる半ば実践的かつ半ば理論的な議論をする場所がある。そして、そこには文学研究者が集まり、本来の研究と平行して、同時にその研究の基盤となるテキスト編集の問題を議論している[2]。

つまり、作家の全集を作るために研究者が集まり、テキスト編集の問題について議論する学問ということである。本書の中で議論されている「学術版」とは、原書では「scholarly edition」と書かれており、編集文献学において研究された全集(デジタルの世界でいうならテキスト集)を指している。また「学術版編集」という用語も同じく「scholarly editing」の訳語であり、編集作業そのものを指しているのだが、学問を指す言葉として表現するために「編集文献学」という言葉を当てたと、明星氏は述べている(355頁)。

文学研究が記録としての資料と切っても切り離せない関係にある以上、編集文献学と深い縁を持つ。つまりそれは、資料そのものを研究対象とするアーカイブズ学とも関連しているといえるだろう。また、アーカイブズ学の世界でデジタル化が叫ばれている現代、編集文献学の領域においても同様に、資料の電子化

の問題について盛んに議論されている。そこで今回は、本書を紹介しつつ、アーカイブズ学と編集文献学の関係を考察していこうと思う。本書は文学研究とアーカイブズ学研究が向かう方向性のヒントが得られるかもしれないと期待できる一冊である。

## 2 — 各章の内容

まず、本書の全体的な構成を紹介する。第1章、第2章では学術版テキストの概念について紹介し、第3章から第6章までは電子テキストサイトを構築する上で問題点を指摘している。第7章と第8章では編集作業の根本的な目的・動機について、第9章では編集文献学における英米系とドイツ系の対立について紹介し、最終章ではまとめとして学問全体が向かうであろう方向性を示している。

### 第1章：

#### 二一世紀における手稿、本、そしてテキスト

第1章では、編集者が行う仕事と、コンピューター時代がもたらした影響について述べられている。編集者の役割というのは、過去の作品を再現/表現する新しいテキストを作り出すことであり、著者の言葉を借りるならばテキストを「再受肉する」ことである。その役割は昔から大筋は変わっていないのだが、21世紀の技術革新によって電子テキストの可能性、種類、ゴールの形が広がってきている。編集者の役割を語る上で3つの視点があるという。第一にテキストとは何か、第二にノイズとは何か、第三に学術編集版を利用する人々とは誰か、この3つである。まず1つめについて、テキストとは、概念的でつかみどころがないものなので、単に語彙コード(文字の配列など)の違いや書誌コード(本の装丁の様子など)の違いだけではなく、テキストがどのような評価を与えられてきたのかと

いう時代による変化が編集作業に大きく関係する。つまり編集者が編集をする上で、「一番関心を持つべきテキストとはどれなのか」という厄介な問いに対する答えは、時代ともに変わってきているのだ。2つめは著者がアップルの社員と話した際、20世紀は「ノイズの世紀」で小さなノイズ、テキストの小さな間違いに耐えなければならないのかと感じたことが述べられている。しかし、第3の視点から考えるとこれには問題がある。テキストに大きな間違いが入り込んでいたり、いい加減な調査をしている団体のテキストに対して、読者はそのテキストが信用のおけるものかどうかを判断できなければならない。著者はこれに対して、文学作品の真正性の基準として「美学」という概念を提唱している。ここでいう「美学」とは、複雑なテキストを一貫性のあるテキストへ変える、混沌としたテキストを調和性のあるテキストへ変えるというような試みのことである。以上のようなテキストを取り巻く21世紀の環境の中で、編集者はコンピューターの力を借りることによって、美しいテキストを創り出す役割を担っているという。

### 第2章：複雑性、耐久性、アクセス可能性、美、洗練、そして学術性

ここではタイトルの中でも、特にテキストの学術性について考察されている。現在、私たちは電子テキストの便利さに驚いているが、その驚嘆度を例えるなら、当時の人がグーテンベルクの印刷技術に驚いているようなことと同じだ。電子テキストと印刷テキストの利便性の比較はおいおい考察されていけようが、学術性の観点から「テキストの質」を考えると、電子テキストに対して疑問が残ると、著者は述べている。ここでいう「テキストの質」とは誤植のようなコンテンツについてではなく、改訂や出版、流通の歴史のようなコンテキストのことである。電子サイトの構築は、コンテキストの

「テキストの質」を視覚的に表現していくべきだと著者は主張している。

### 第3章：書記行為理論

この章では書記行為理論をふまえて、テキストをどうやって電子編集するのかという問題が議論の中心となっている。書記行為とは、書き手も読者も同一の条件下で行われるもので、その同一の条件は知識の共有やコンテキストとも言えるものである。書記行為理論をふまえると、学術版テキストにはコンテキストが補足されなければならないと著者は考えている。その理由は、コンテキストが読者に共有されていないと、文学作品における作者の意図の解釈にずれが生じてしまう。読者は貧相な書き言葉のみで、作者の意図を推測しなくてはならなくなる。テキストの画像イメージだけで、作品そのものにアクセスしたといえないのはこれが理由である。編集の仕事はこれを克服しなくてはならないと著者は主張する。

### 第4章：書記行為を再現するための

#### 電子的インフラストラクチャー

第4章では2つの話題について触れている。1つめは、文学テキストを電子的に再現するために必要な概念空間について。電子編集を「インフラストラクチャー」、つまり人間の生活の質を高めてくれる水道、道路、橋を整備することと同じだと考えるとわかりやすいという。インフラの整備と電子編集の共通の目的は、人間による計画、戦略、目標設定だからだ。2つめは、電子テキストサイトを構築する際に発生する現実的な問題である。価格がつきにくい電子テキストの値段設定、TEI準拠XMLについて、編集に関わる人が大勢いることから賃金の問題など、著者が実際に直面した具体的な問題を例に挙げている。全体を通して、これから学術版サイトを構築する人にとっ

でのノウハウ本的な内容になっている。

### 第5章：ヴィクトリア朝小説——

#### 読みを形づくる形

本章では、コンテキストの問題について具体例を挙げて述べられている。著者が研究をしているヴィクトリア朝小説は、英米文学の中ではマイナーな分野だが、近年注目されてきている。最近の研究では、「タウフニッツ版」という早刷りの歴史が明らかになった。その版は、タウフニッツという商人が賄賂によりテキストを入手して早刷りした版で、最終校正前のバージョンであった。この版と現代に読まれている版を比較するのは編集者にとって大切な仕事であるし、「早刷されていた」というコンテキスト自体が重要な情報である。テキストの研究、批評、解釈をする際に、オリジナル版を現代の感覚で読むことは意味が異なる。コンテキストを追求することは長い時間を要するだろうが、重要な作業なのでくじけてはいけなと、著者は今後の展望を明るく締めくくっている。

### 第6章：電子テキストのじめじめした貯蔵室

冒頭でセオドア・レトキの「貯蔵室」の詩を引用している。その詩は「じめじめした貯蔵室」は快適なものではないが、カビという生命が息づくことを賛美したものだ。しかしここで著者はその「じめじめした貯蔵室」をネットの世界、そして「カビ」を「誤りの多い電子テキスト」に例えている。レトキの詩では「じめじめした貯蔵室」を肯定的にとらえているが、学生たちが誤りのある電子テキストの正確さや出所を吟味することなしに利用することには問題がある。詩人・ロッセティのコレクション編集の際、「客観的」に見えるデジタル・アーカイブズが提唱されたが、著者は印刷版から電子版を編集する行為の過程でその問題点に気付いた。電子テキストやナレッジサイトを構築する際には、「じ

めじめした貯蔵室」の「カビ」=誤りをできるだけ少なくするよう、掃除や見張りによって誤りを見つけることが必要である。それゆえ、編集者の仕事は古い学術編集版を大胆かつ率直に編集して、新しい学術編集版を補うことであり、それは次の世代へテキストを繋ぐことであるという。

## 第7章:編集文献学の競合する目的を

### 調和させることについて

本章では「ロス」という表現を用いて、学術版の編集過程で失われた要素について考察している。1960年代にはポジティブな編集方針、つまり存在しているテキストから作家の最終的な意図を確立することなどが積極的に強調されてきた。しかし、そのようなポジティブな編集は常に学閥争いや読者からの批判にさらされることになり、編集目的までも見失うことに繋がってしまった。そのようなトラブルを避けるためにも、損失に対して寛容になることが重要で、編集には必然的に損失が含まれることを受け入れるべきだと著者は主張する。例えば、電子テキストにしてしまえば紙やインクの質感は絶対に再現できないし、テキストに作品の改変について注釈を入れればその作品における唯一無二感は失われてしまう。損失について以上のように考えることで、編集者が学術版を編集する際の目的を見誤ることはないし、特定の目的のために編集された学術版に対して読者も寛容になれるだろうと、ある種言い訳のように述べている。

## 第8章:聖人崇拜、文化のエンジニアリング、 モニュメントの構築、 その他の学術版編集の機能

この章では学術版の編集を行う動機について述べている。電子テキスト化以前の時代には文学者に対する聖人崇拜があったため、テキ

ストを文化遺産として保存し、復元することにその目的があった。しかし現在は、利用者にテキストへのアクセスを提供することが主な目的になっており、「文化のエンジニアリング」(文化を編集文献学者が作る)という動機は自己欺瞞だと著者は考えている。「文化のエンジニアリング」という動機を捨て去り、編集文献学者が「完全な」学術版をあきらめると何が残るのか。この答えは、誰もテキストの考察を行わなくなるだろうと著者は予測している。また、仰々しい動機を捨て去ると編集者の荷が軽くなって大胆な解釈が可能となる。学術版に編集者の洞察や批評が入ることは避けられない。これに対して、学術版テキストが主観的になりすぎるという批判がある。しかし、一方で「客観性」を追い求めると、個人の判断が全く介入できなくなり不十分な学術版になるとも考えられる。学術版とは、作品を解釈する際にテキストの歴史が非常に重要であることを証明するものであり、それを様々な分野の学者にアピールしていかなければならない。

## 第9章:審美的な対象——

### 「私たちの喜びの主題」

ここでは英米系とドイツ系の編集文献学者の学術編集版に対する認識の違いを、作家、出版文化が負ってきた歴史的背景を中心に比較している。両者には学術編集版について誤解や認識の相違があり、その相違とは審美的対象への態度の違いである。作家が考える審美的対象の構築を試み、学術編集版で「オーソライズ」(権威を保証)するのが英米系である。これに対してドイツ系は、前者のような構築の仕方ではどうしても個人的解釈が入ってしまうため、ドキュメントをテキストとして読者に提供するための学術編集版を生み出す。このアプローチの違いは、英米系は手稿が残っていないシェイクスピア作品の編集の仕事で



あったのに対して、ドイツ系はゲーテ本人が出版に関わった作品の編集の仕事であった、というその対象をめぐる歴史的背景の違いによるものだと著者は推測している。そして「オンライン」するテキストについても、英米系は作家が明白な指示を出した部分だけと考え、ドイツ系は作家の手が入ったドキュメントすべてと認識している。これらの違いにより、将来の研究者に対して学術版編集に関する影響を与え続けているだろうと著者は述べている。

### 第10章：文学研究における無知

最終章では学問の「無知」について考察している。文学研究の「無知」とは、テキストの「ノイズ」ともテキストの誤りとも言える。ノイズは電子テキスト編集に限って現れる現象ではなく、印刷時代から存在している。このノイズによって論文が台無しになった例を著者は見ている。しかし学問において、無知からくる好奇心は必要なものである。著者は本章の中で「無知」を細かく分類した。しかし、これらの根絶は不可能である。その理由は2つあり、1つは知識にノイズはついてまわるということ。もう1つの理由は、私たちが知る事実は私たちがどのような立場を取るかに依存し、変化するからである。学問の世界から無知を根絶できないからといって絶望する必要はなく、常に違う立場の意見に耳を貸し、探究心を持ち続けなくてはいけない、と締めくくっている。

### 3 ——— まとめ

さて、ここで気になった点をいくつか指摘しておきたい。

まず1点目は用語の難解さである。特に第4章で、学術版出版を電子的インフラストラクチャーとして構築するための問題が描かれているが、「ASCIIファイル」や「CASE 準拠簡

略コード」など、一般の読者にはなじみが薄い言葉が頻出する。本書の内容は編集文献学について広く浅く解説しているので専門的な用語が出てくるのは当たり前であるが、もう少し説明を加えてもいいのではないだろうか。また、同じく第4章ではナレッジサイト構築のノウハウについて説明しているが、すべてを文章で説明しようとしていてわかりにくい。実際のウェブサイトの画像や図を用いて説明すれば、読者はイメージが捉えやすく、すんなりと読むことができるだろうと感じた。

また、本書の中で当たり前に使われている「編集文献学」や「学術版編集」といった用語は、日本の読者には馴染みがない言葉である。「訳者あとがき」の中でその定義や用法の難解さを明星氏が語っているが、冒頭でもう少し明瞭な定義を提示すれば一段とわかりやすいものになったのではないだろうか。

2点目は編集文献学者とアーキビストの果たす仕事の役割についてである。本文中の以下の文章に、著者の編集文献学者とアーキビストに対する認識が端的に述べられている。

アーキビストは、実物、すなわち手稿や本といったものの現物を保存する。一方、編集者は、テキストを過去から生き返らせるか、少なくとも生き返らせたように見せかけるという奇跡のような仕事を行う。(4頁)

著者の主張によると、編集文献学者は学術版編集の電子サイトを構築する際に、編集者の存在・介入を積極的に読者に提示するように求めていることが、以下の文章からわかる。

印刷版に続き、電子版においても、学術編集版の理想の編集者像は変わったのだ。最終的にはプロジェクトから自らの存在をはっきりと大胆に明言したうえで、読者にも、編集行為は批評行為なのだとして理解するように求めるような編集者へと。(200頁)

一方でアーキビストの仕事については、「ライブラリアンやコレクターやアーキビストがテキスト性の物質的な実体を保存するという重要な仕事」(19頁)、「一見真に客観的に見えるデジタル・アーカイブ」(199頁)などのように、単に「資料を保存する」だけの仕事と受け取れる表現が見られるが、果たしてそうなのだろうか。

ここで私が主張したいのは、著者のアーキビスト観に異議を唱えることではない。アーキビストが資料のレファレンスに対してどのように対応するのか、という利用者への提供方法の問題だ。資料提供時におけるアーキビストの資料解釈は、本書で著者が主張している「編集者の介入」にあたる。電子テキストを提供するために、オリジナルテキストに対して積極的に意見を加えていく編集者。利用者に対して、オリジナル資料を提供するアーキビスト。どちらも資料に対するアクセス権を利用者に保証しているが、その提供の方法が異なっていると言える。

具体的には、レファレンスを受ける際に資料解釈までアーキビストが導いてよいのだろうかという疑問がある。もちろんそれはレファレンスする側(利用者)の見識にもよるだろうが、アーキビストのマインドの違いが確実に影響するのではないか。それは取り扱う資料の性格に大きく影響されるものでもあるし、職業観の違いもあり得るだろう。

編集作業をすることは「村をあげての仕事」(126頁)と著者が例える通り、さまざまな職業の人と関わる。そこでアーキビストが果たし得る役割とは単に資料を利用者に提供するだけでいいのか、それともある解釈を提示することまで関わるのか。アーキビストはその資料に精通しているので、時には「編集者」にもなり得るだろう。また、学術版を構築する際には、デジタル・アーカイブズとも深く関係する。著者は本書の中で再三、学術編集版は見えない

コンテキストまで提供することが使命だと述べていて、前述のようにデジタル・アーカイブズは「客観的に見える」という含みを持たせている。これらのことから、編集文献学者もアーキビストも、それぞれの仕事のゴールをしっかりと見定めるべきだと感じたし、アーキビストの職業観について考えさせられる内容であった。

今回、編集文献学をアーカイブズ学と絡めて本書を紹介してきたが、全体を通して感じたことは、両者ともまだまだ発展途上段階であるということだ。そう感じた理由は『ゲーテンベルクからグーグルへ』というタイトルと関係する。このタイトルが示す意味は、「ゲーテンベルクが開発した印刷技術によって多くの市民が本を容易に手に入れられるようになった過去から、「Google」で手軽に電子テキストの本を探ることができる現在へと変化する歴史の流れである。編集文献学の電子テキスト化は始まったばかりで、電子版学術編集の方法について試行錯誤を重ねている。アーカイブズ学も同様に、デジタル・アーカイブズの分野では、技術革新の流れに対応するために常にあわただしく研究している状態だ。そんな時代の中で、本書は文学や編集文献学にどっぷりつかっている人だけでなく、これからアーカイブズ学ともっと深く関わろうしている人にも必要な要素が書かれていると感じた。本書は私が研究テーマとする「文学アーカイブズ」が発展途上な日本において、ガイドラインのような役割を示す一冊となることを期待する。

1—— 明星聖子「文学研究資料の未来をめぐる一考察——編集文献学とアーカイブズ学の狭間で」、『アーカイブズ学研究』第11号、2009年、97頁

2—— 同、98-99頁